

4-1-9-3 麻酔科

朝原 章二（鈴木康之）

麻酔科医の業務は医療関係者の中でも分かりにくい。危機管理の専門家として、開設間もない成育医療センターにおける患者の安全確保に全力を尽くしたが、日本式悪平等の経営改善の中で、患者の安全を守るのに苦渋した1年であった。電子カルテによる患者把握、手術予定設定、薬剤使用、献体搬送など、日常臨床の基本的な部分が未整備で、麻酔科医が直接患者管理以外に費やす時間は未だに問題であり続けた。

成育医療センターの手術部は通常の手術室9室に加えて、麻酔を必要とする検査のためにMRI、心カテ検査室の2室も手術部内に併設されている。その運用は効率的な手術計画が組めるように、旧来のような固定された手術枠を決めず、患者を中心に自由に手術計画を設定可能とした点が大きな特徴である。手術待ち患者の多い診療科、新しい手術を取り入れる診療科からは理解されたが、手術数急増の波の中で将来を見越しての対応が許されず、その特徴がなかなか理解されなかった。

2003年中の麻酔科管理件数（全身麻酔手術、検査等を含む）は4008件であった。これに212件の無痛分娩が加わり、さらに局麻下鎮静検査などへの関与を合わせると麻酔科の関与総計は4500例に達したと考えている。子どもが夏休み期間中の症例数は特に多く7月は354件であり、麻酔科医は夏休みをとることは勿論学会研究会への出席もままならない状況におかれた。夏休み期間は職員も手薄であり、その時期に症例が多いことは病院全体としての問題でもある。手術症例としては、一般外科636例、耳鼻科496例、眼科331例、形成外科264例、脳外科243例、泌尿器科222例、整形外科124例、そして心臓外科122例など通常の小児病院で多い症例に加え、心臓カテーテル検査の麻酔が243例、そして産科婦人科関係の成人症例が約600例となっていることが特徴である。時間的な計画がたてられない帝王切開を中心とした産科関係症例と、加えて甲斐のある仕事であるが212例の無痛分娩症例も麻酔科医の仕事負担を増やしている。小児麻酔をこれだけ集中的に行っている施設が少ないことの反映ではあるが、麻酔科医の仕事が効率的にできる体制にない現状で、患者の安全を守るためにも、6名体制の麻酔科医が同時に7例以上の症例の進行をカバーする可能性をなくすことの重要性を理解してもらうには苦勞する。実際には、手術室症例以外に、麻酔科外来での術前患者評価、指示に2名の麻酔科医が必要なこと、そして病棟に分散した人工呼吸管理患者の回診などがあげられる。その大きな理由が患者の全体像把握に時間がかかり、また食事や前投薬、そしてモルヒネなどの指示出しが複雑な現状の電子カルテとその運用システムの犠牲になっていることがある。来年度はそうした面で周囲の理解を求め、改善を目指したい。